

大道芸 アジア月報 2025 年 7 月

vol. 37, no. 7

編集・発行人 上島敏昭

〒165-0025 東京都中野区沼袋 2-31-2

春山荘・東

★大道芸案内

主な大道芸スポット（土・日・祝日など、通年大道芸が見られるポイント）

■大阪・天保山海遊館広場 <https://www.kaiyukan.com/thv/marketplace/>

■大阪パフォーマーライセンス <http://www.osaka-performer.com/index.php>

■名古屋・大須ふれあい広場 ■名古屋 POP UP ARTIST <http://popup-artist.com/index.html>

■しづおか大道芸の街 <http://shimarukai.org/> ■江ノ島大道芸 <https://www.fujisawa-kanko.jp/feature/daidogei.html>

■ヨコハマ大道芸（山下公園、グランモール公園、）<http://daidogei.jp/>

■中部大道芸ネットワーク <https://www.facebook.com/mrkrddg>

■仙台まちくるパフォーマーズ <https://machi-kuru.com/performers>

■東京都へブンアーティスト（「東京都文化生活スポーツ局—文化振興」で検索）

★浅草雑芸団の旅

△浅草雑芸団・木馬亭公演「あつという間の 40 年～一睡の夢」○浅草木馬亭

●7月 11 (金) 18:30 / 12 (土) 13:30

出演：浅草雑芸団 雜芸のかずかす、過去のゲスト出演者の秘蔵映像公開

ゲスト：「地獄絵」絵解き・竹澤環江（長野市西光寺）、あがた森魚ミニライブ

前売り￥3500 (当日￥4000)

予約・問合せ：090-6142-0106 (カミジマ) ※早朝・深夜はご遠慮下さい

★今月の大道芸公演

△買い物公園まつり <https://www.kaimonokouen.com/event/7795> ○旭川平和買い物公園

●6月 28 (土)

ソランポ・ソラン、バルーンアーティスト Syotaro、望月ゆうさく、ニ助企画猿まわし

△下町七夕まつり <https://www.city.taito.lg.jp/event/kanko/shitamathitanabata.html> ○浅草・かつば橋本通り

●7月 4 (金) ~8 (火)

阿波踊り、佐渡おけさ、大道芸

△きらり★ふじみサーカスバザール 2025 <https://www.kirari-fujimi.com/program/view/730> ○埼玉県富士見市・市民文化会館

●7月 11 (土) 12 (日)

メインホール（有料公演）『Life's a circus—人生はサーカスのようだー』

演出：油布直輝 出演：Funny Bones、長谷川愛実、森田智博、長すみ絵、吉川健斗、Honoka、サゴー、油布直輝

両日とも 13:30 開演

一般￥1500、高校生以下￥800

日時指定、自由席、要整理券

申込み・問合せ：富士見市民文化会館キラリふじみ 049-268-7788

マルチホール（無料公演）『駄芸スナックの昼下がり』

出演：天才イカレポンチ、バーバラ村田、どん・ぺんた、ジャグラーKAZU、Kanon&Rio!

両日とも 11:00 開演 / 15:30 開演

入場無料、申込み不要（但し、状況により入場を制限する場合があります）

そのほか、かぼちゃサーカス団パレード、ジャグリング体験など

△サーカス学会・サーカス学セミナー「綱渡りのコスモロジー」○させだ大学戸山キャンパス 32 号館 128 号室

●7月 12 (土) 15:00 開演 <https://www.facebook.com/CIRCUSGAKKAI/>

講演：「高所綱渡り師という生き方」石井達朗

：映像で見る高所綱渡り・解説・大島幹織

：綱渡り師は語る・ビデオ出演・清水恒雄

入場無料

△エンターテイメント亀戸！vol.27 <https://www.kameidodaidogeい.com/> ○亀戸十三間通り商店街

●7月13（日）

△沢入国際サーカス学校・夏の発表会 https://x.com/sori_circus ○沢入国際サーカス学校（群馬県みどり市）

●7月19（土）20（日）両日とも13:00開演

△座・高円寺「世界をみよう！」<https://www.za-koenji.jp/detail/index.php?id=3435> ○座・高円寺

●7月19（土）～8月3（日）

A:わたしのねがい（デンマーク）シアターブリック（7/19～7/21）

B:フラッグ（日本）ゼロコ（7/19～7/21）

C:ンカマ～とき～（モザンビーク/フランス）ディマス・ティヴァンヌ（7/25～7/27）

D:さあ！（フランス）カンパニー・ソン・ドゥ・トワル（8/1～8/3）

￥2500 子ども￥1500 未就学児￥500

全席自由

△せたがやアートファーム2025・アロフト・サーカス・アート『ブレイブ・スペース』 ○世田谷パブリックシアター

●7月28（月）～31（木）<https://setagaya-pt.jp/stage/>

￥3500

△コメディとクラウンのしらべ <https://asakusa-gekitei.jimdosite.com/%E5%85%AC%E6%BC%94%E6%83%85%E5%A0%B1/> ○あさくさ劇亭

●8月2（土）15:00 & 19:00 / 3（日）13:00 & 17:00

おっとちゃん、かお、たかくわみえ、タラン・ニバキンス、パール・F/市丸、メランコリー鈴木

ゲスト：三雲いおり

前売り￥2500 当日￥3000

予約 <https://forms.gle/cSpB2y6TtudApYtf9>

△真夏の夜の夢2025 in マザーポート高松 <https://www.machikadomusic.net/2025/05/mnt2025/> ○香川県高松市 サンポート高松

●8月2（土）～10（日）

カンパニー・デ・キダム

加納真実。芸人まこと

△第18回はこだて国際民族芸術祭2025 <https://wmdf.org/> ○函館市元町公園ほか

●8月5（火）～11（月）

タカペーチ、てまわしオルガンキノ、ボールド山田、3ガガヘッド（8～11）、バンバンダー（8～11）、suke3&syu（8～11）、

クラウン・リオ（5～7）、

△いいだ人形劇フェスタ2025 <https://www.iida-puppet.com/> ○飯田市内・各所

●8月7（木）～10（日）

山本光洋、ふくろこうじ、ましゅ&Kei、オマールえび

△北の大地de大道芸2025 <https://www.tokachinatsufes.com/> ○帯広市

●8月11（月祝）ばんえい競馬場

12（火）浦幌町

14（木）15（金）フェスティバルのメインイベント

16（土）帯広市内

17（日）道の駅おとふけ、道の駅しらぬか

△アートタウンつくば大道芸フェスティバル2025 <https://arttown.amebaownd.com/> ○つくば市 つくばXP「つくば」駅周辺

●8月23（土）24（日）

△豊岡演劇祭2025 <https://toyooka-theaterfestival.jp/> ○豊岡市 養父市

●9月11（木）～23（火）

△SAPPORO PERFORMANCE PARTY！2025 <https://www.sapporo-performance-party.com/> ○札幌駅前地下歩行空間

●9月27（土）28（日）

Mr. BUNBUN、チルク・アビー、PESTRiCA、渡辺翼、空転軌道、TeTe、

若林正の

食って極楽

アップデート！

高田馬場「麻婆唐府」

今回の店は確か三年前に書いた処だが、先日久しぶりに昼飯に訪問したら、店が改装されてお洒落になっていた。昔は 650 円で腹一杯に食えたのだが、果たしてどうなったのか？ 店内も明るく広々となつた。まず注文がタブレット端末で行うことになっていた。最近都会の飲食店は、人件費節約のためかこのスタイルが増えているが、ワタシのような高齢者は少しまごつく。

定食、一品料理、麺類など細かく分かれて表示されるのでわかりにくい。スクロールしながら値段を確認すると、やはり値上げしていた。定番の麻婆豆腐定食が¥850。その価格帯が少なくなり、¥900～¥1000 台の定食がメインになっている。珍しい四川料理も多いので、割高感はそれほど感じないけど。ということで注文したのは、初めて頼む豚足と青唐辛子炒め定食¥1050。飯と汁、味付け卵、搾菜を唐辛子で合えたものに豚のあばら骨を茹でたもの等、副菜が食べ放題！ 杏仁豆腐も。それを考えるとまだ安い。豚足は骨を外して細かく切ってあり食べやすい。



独特的の香辛料やニンニクが効いており、濃い目の味付けで実に美味だ。搾菜も塩気が濃くて飯が進む。気付くと三杯目。思えば前は、麻婆豆腐か酢豚か野菜炒めのような無難なモノばかり食べてたな～腹一杯になって大満足。又通つてみるか。

○本格的な中華は奥が深い度～10 ワカ

大道芸・見たり・聞いたり・演じたり

☆その 404

映画「国宝」の原作

上島敏昭

○映画と小説の「国宝」

映画「国宝」(原作: 吉田修一、監督: 李相日、配給: 東宝) を見た。おもしろかった。コロナ禍のころ原作小説を読んで、とてもおもしろいと思いつつ、映画にするのは無理だろうとも思つていので、とにかく見にいった。

まず客入りが良いのに驚いた。原作がおもしろかった映画は、たいていの場合、つまらないと思うのがだが、この映画はそんなことはなかった。というよりたしかに予想以上の面白さだった。

とはいえる、原作との違いに、なんだかすっきりしない違和感があったのもたしかで、ここではそれについて書いておきたい。一つは、上方歌舞伎のこと。かつて東京の歌舞伎とは別に上方歌舞伎というものがあり、そこで二人の若者が修行し、東京に吸収されたあとそれが尾をひいているのだが、それについてはいっさい説明なし。これは不親切であろう。もう一つは、歌舞伎界と任侠の世界との関わり。これは原作ではかなり濃厚にでているのだが



おそらく映画では意識的にぼやかしている。三つ目は、役者の世界の血筋ではない喜久雄が半次郎の跡を継いだことに焦点があてられているが、小説では血筋のために七転八倒する俊介も同じ比重で描かれる。芸に取り憑かれてしまった人間の苦悩という点ではどちらも描いてほしかった。ほかにもあるのだろうが、ここではこの三つについて述べたい。

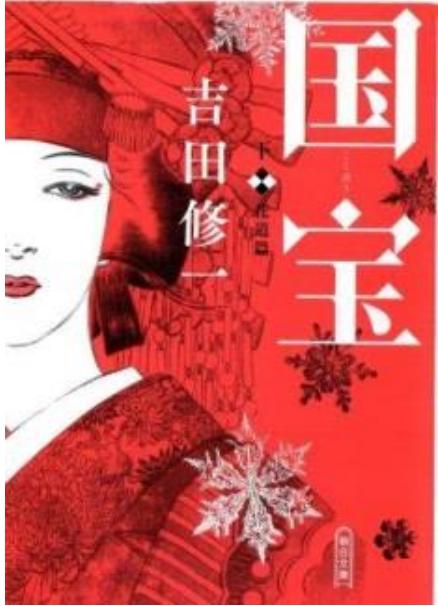
○上方歌舞伎の世界

原作と映画で描かれるのは上方歌舞伎の世界である。大阪歌舞伎座や京都南座が舞台となっているということではなく、東京の歌舞伎とは一線を

画する上方歌舞伎という世界が、近年まであったのだが、まったく説明されない。私もそれほど詳しくはないが、付け焼刃ではあるが、記しておきたい。

江戸時代からの、上方と江戸では、同じ歌舞伎でも好まれるものが別で、両者は交流しつつも、それぞれの芝居造りをしていた。明治の歌舞伎の大変革期になってもその流れは変わらなかった。東京で九代目市川団十郎、五代目尾上菊五郎が近代歌舞伎を作ったとき、上方では初代實川延若、初代市川右団治、中村宗十郎などの名優が活躍していた。明治末ごろ、彼らの薰陶を受けた初代中村鴈治郎が頭角を現すと、興行会社としての松竹が、彼と手を組みつつ勃興し、やがて演劇の興行権を独占する。

大正から昭和十年ぐらいまでは人気実力ともに備えた鴈治郎を中心に、役者の陣容もかたく、興行も安定していた。ところが第二次大戦でほとんどの劇場が焼け、役者も失われると急速に力を失った。昭和 24 年、武智鉄二による「武智歌舞伎」と称された実験的な歌舞伎改革運動で、四代目坂東鶴之助 (五代目中村富十郎)、二代目中村扇雀 (四代目坂田藤十郎) が実力をつけて、スターとなるも、大企業がつぎ



つぎと本社を東京に移転するなどして経済界の停滞もあって、独立した興行はしだいに少なくなり、昭和30年ごろには単独興行は打てなくなっていた。その後、昭和33年からの「七人の会」（二代目鷹治郎、十三代目仁左衛門、十三代我童、林又一郎、五代福助、延若、扇雀）、昭和37年からの十三代仁左衛門による「仁左衛門歌舞伎」、昭和52年からの二代目沢村藤十郎による「関西で歌舞伎を育てる会」などを立ち上げて、上方歌舞伎を盛り上げようとする動きが、たびたび興って現在に至っている。

映画は昭和40年ごろの上方歌舞伎の場面が出る。半次郎旦那が、身銭を切って劇場を借りて芝居をうって、俊介と喜久雄の若者二人を鍛え上げるのだが、おそらくその姿は仁左衛門歌舞伎と、そこで修行した片岡孝夫・秀太郎・我童兄弟の姿と重なっている。

○任侠の世界

小説も映画も冒頭は、長崎の料亭での賑やかな忘年会。そこで演じられる舞踊の華やかさと明るい笑い声が、とつぜんヤクザの出入りとなり、無粋な怒鳴り声わめき声、走り回す足音、転ぶ音、家財や食器が壊れる音、さらには日本刀やドスが振り回され、やがて父親の権五郎親分が殺される凄惨なシーンに変る。これで孤児となった喜久雄が大阪の歌舞伎役者である半次郎の

弟子になる。このとき、小説では喜久雄の守り役である徳次という男がいっしょについていくのだが、映画ではカットされている。同様に、中学生であった喜久雄の、すでに情婦だった春江という女の子が、二人を追って大阪にやってくる。喜久雄、徳次、春江の三人は、小説では、最後まで行動を共にすることになるのだが、春江の存在感も、映画では薄い。

考えてみれば、二人の主人公、俊介と喜久雄は、どちらもそれぞれの世界の若旦那なのだ。つまり、俊介はいうまでもなく、歌舞伎の世界の若旦那。喜久雄は任侠の世界の若旦那。ともに守り役がいて、道を歩くときは先導し、危ないものはとりのぞき、仮に不始末をしてかしたらその後始末をする。半次郎親方の庇護下にあったときの俊介が、ずっとそうした状態であったように、任侠の世界の若旦那である喜久雄には、ずっと徳次がついていた。小説では、背中に彫り物を背負った人間同士、「お前のためなら死ねる」という濃厚な関係にいる、徳次という人物をある種のトリックスターにしながら話がすすむ。おそらく小説は、歌舞伎の世界と任侠の世界の近しさというのは、自明の理なのだ。しかし、映画では、徳次の登場は最初の長崎のシーンのみ。ヤクザの男同士といえば、まむしの兄弟でも兵隊やくざでも、すぐれた先例がたくさんあるのだが……。

また、小説では冒頭の忘年会にも登場するヤクザ仲間の辻村は、喜久雄が役者になってからも、ずっと半次郎や喜久雄の近くにいる。ヤクザものの辻村は、その後ヤクザの世界、いわゆる裏社会で足元は固めつつ、表向きはいくつもの会社を経営する社長として、半次郎の興行を支援するのだ。そもそも、ヤクザの忘年会に歌舞伎役者が顔を出すという冒頭からして、二つの世界は密接につながっていることの証である。

○血筋のものとしての苦悩

喜久雄は、ほんとうにひょんなことから、半次郎の代役に任命され、それがもとで俊介は家を出て、結果的に半次郎の名跡を継ぐ。これが本格的な苦労のはじまりとなる。映画では、その喜久雄の苦悩がテーマとなるのだが、原作は同様に、家を出てからの俊介の苦悩も、喜久雄と同等の重さで描かれている。喜久雄が徳次なしでは何もできないように、俊介も一人ではなにもできないのだ。

映画では、出奔してから十年後、ストリップ小屋で旅回りの劇団で芝居をやっていたのがわかつて、テレビのワイドショーに取り上げられて、歌舞伎界に復帰する。このあたり、やや唐突な気がするのだが、小説ではかなり細かい。山陰の三朝温泉のストリップ小屋で、変な見世物芝居をやっているらしいという噂を聞いて、お笑いネタになるかもしれないと、歌舞伎の興行師だったテレビプロデューサーが見に行くと、それが俊介だった。その化け猫芝居の物凄さに言葉もなく、これはお笑いどころではなくちゃんとした番組を作るべきだと画策する。そして女方の最高峰、小野川万菊を連れて行くと、万菊もその姿に目をみはり、楽屋をたずねる。とつぜんの大歌舞伎役者の来訪に驚く俊介に向ってこう言う。

「今の舞台、しっかり見せてもらいましたよ。……あなた、歌舞伎が憎くて憎くて仕方がないんでしょ。……でもそれでいいの。それでもやるの。……それでも毎日舞台に立つのが、私たち役者でしょ。」

この言葉も、かなりいいセリフだと思うが、じつはそれ以前、俊介はストリップ小屋の化け猫芝居など問題にならない苦労をしていたことが明らかになる。よくこんなストーリーが浮かんだものだと思うが、そのくらいの苦しみがあるからこそ、ひとを感動させる芸ができるのだとも思った。

いずれにしても、映画も傑作だが、原作もよくできた芸道ものである。